

幼児期の対人葛藤場面における情動調整について

- 「ことばの表現力」と「言語表出」・「コーピング行動」からの検討 -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
高森 美紗

幼児期は他者との世界が拡大し始め，対人葛藤の経験も増加する時期であることが予想される。この時期に不快な情動を調整する意図的で目的的な情動調整行動が機能し始め，また他者が自分とは異なる信念を持つことへの理解が進み，言語も行動の調整機能を持ち始めるといわれている。そこで本研究では，幼児にとっての情動調整困難な場面の把握を行い，新たな情動調整行動としての言語表出やコーピング行動がいかにことばや他者視点の獲得と関わっており，また，その情動調整行動がどのように日常場面で発揮されているかどうかを検討することを目的とした。

研究1においては，4歳児27名（女児18名，男児9名）を対象に実験的観察場面において「心の理論（誤信念課題）」「対人葛藤課題（佐藤ら，2003）」「ことばの表現力課題」を実施した。「対人葛藤課題」は葛藤構造の異なる4図版それぞれに，現実的対処理由結果予想主観的願望の4つの質問を行い，言語表出，コーピング行動，感情の言語化の有無により回答内容を分類した。「ことばの表現力課題」は4枚の絵図版に対し自由に作話をしてもらい，叙述による「作話量（内田，1982）」，「統合度（松浦，2005）」，「外挿度（松浦，2005）」，「感情の言語化」の観点より回答内容を分類した。分析においてはそれらの関連を見るためにFisherの直接法で検定し，課題間の有意確率を見た。研究2においては同対象児の保育場面における対人葛藤場면을参与観察し，事例での対人葛藤・情動調整時の言語表出やコーピング行動と「対人葛藤課題」で表出されたそれらとの比較を行った。

研究1の結果より4歳児においては集団場面での対人葛藤は規範に則った共通の対処方法があり，一方で1対1場面ではより対処が難しく情動の喚起が起こりやすいことが示された。また，「ことばの表現力課題」の「統合度」は自己抑制場面において社会的問題解決能力としてのコーピング行動を表出することに関連が見られ，「外挿度」は集団場面において自分の感情を認知して言語化できることに関連すると示唆された。一方で「心の理論（誤信念課題）」はいずれの課題とも関連は見られなかった。また，研究2の結果からは，実験的観察場面において表出された対人葛藤対処方略や情動調整行動としての言語表出やコーピング行動は，必ずしも実際の対人葛藤場面において表出できるわけではなく，4歳児においてはまだ認知的な社会的問題解決能力と実際の場面での行動化には開きがあることが示された。けれども実際の対人葛藤場面での言語表出やコーピング行動が一様に減少するわけではなく，感情の言語化による象徴化によって葛藤相手と共有できやすい負の情動表現を行っていた事例では言語表出やコーピング行動が盛んに行われていたことより，対人葛藤場面において先に感情の言語化が充実して行われることが情動調整に重要であることが推測された。